

私はミニトマトが大好きだ。特に夏のトマトは、独特の青っぽい爽やかな香りが強く、匂いだけで記憶から呼び起こされる風景がある。スカッと晴れ渡る空に広がる濃い青、夏の勢いを地上に届けようとあたり一面を眩しく照らす太陽の白、そして自分を丸ごと覆い包み風に揺れる緑。これは曾祖父母の畑で遊んだ日の一部だ。

曾祖父母はとても元気で、よく笑い、よく動き、力強い人達だった。広い広い田畑をほとんど二人で手入れをする優しい印象だ。昔から、収穫した野菜をその場で安全に食べることができるよう、ほとんどの野菜は無農薬栽培をしていた。

曾祖父母の畑で食べるミニトマトは、口に入れた瞬間にあの香りが一気に鼻まで抜ける。果汁が口から飛び出さないようにそっと歯を立てると、薄い皮がパリッとはじける。甘い果肉と酸味のある果汁が口の中いっぱい広がるから、溢れないように急いで喉に流し込む。果肉をかみしめ飲み込んだら、目の前にある鈴なりの中から一つ取り、また食べ

る。

今年の夏が始まる頃、トマトの思い出はあがる栽培の知識はない状態で、一本の苗を育てることになった。技術の授業の一環として私の元にやってきた苗は、手の平サイズの黒いポットに入っていた。土の上から二十センチ程の細長くて弱い茎に萎れた葉がついていた。私知っていたいる苗は大人の背丈よりも高く、ビニールハウスに届くくらい大きかった。この手の中に収まる苗は、本当に実をつけることができるのだろうか。風に吹かれてポキッと折れてしまうのではないか。不安を感じながら苗を観察していると、ギザギザの深い切れ込みがある葉にはシワがたくさんあり、薄緑色の新芽には白い産毛が密集して生えていた。大きい葉は濃い緑色で、もつとよく見ようと顔を近づけたらあの香りがした。新鮮で夏を生きているトマトの香りだ。

「この苗は大丈夫。小さくても力強く育ちそうな夏の匂いがする。」そう確信した。複数の土と肥料を混ぜ、プランターに入れる。中央に軽く穴を空け、そこに苗をそっと置く。ふかふかの土を根元に寄せ集め、手で上からギュッと押さえる。元気に育つてねと気持ちを込め、もう一度ギュッと押さえた。

一週間後に水やり当番だった私が見た苗の姿は素晴らしく、背丈は伸び、葉は太陽にむけて両手を広げるようにピンと伸びていた。花のつぼみができていた。小指のつめの半分もないくらい小さなつぼみは、先端から黄色の花びらをのぞかせていた。

そこからの成長は早く、日々の変化が楽しみで部活動の帰りに友達とトマトを見に行くことが習慣となった。見る度に葉が増え、わき芽や新しい花が咲き、太くなる茎には、もう弱弱しさはない。暑い陽を浴びた分、一気に花が咲いた。一センチ程の五枚の黄色い花びらで花が終わるとがくが反り返り真ん中に小さな緑色の実ができる。水やりをすると実はふくらみ、太陽の熱を吸い込むように緑から黄、黄から赤へと色を変え、みんなが知るミニトマトに成長した。艶があり真ん丸、愛情たっぷりなトマトは、命を感じる赤い宝石のようだった。

初収穫で成果は三つ。潰してしまわないように、割れてしまわないように。家族は喜ぶかな、どんな顔をしてくれるかな。緊張と期待と一緒にティッシュに包み込み、家へ持ち帰った。半分は切って家族で試食した。甘くておいしい。が、みんなの様子が気になり順

番に顔を見渡してみた。パッと目を開き徐々に笑顔になった。すごいね、おいしいね、ありがとう、とそれぞれが声を掛けてくれた。

家族が私に感謝をしてくれたとき、「食べなくてありがとう」という気持ちがあった。私の努力で笑顔が生まれるならば、もっと頑張れる。きっとこの感情は、私の曾祖母やその前の祖先が大切にしてきた生きることそのものにつながるのではないだろうか。

曾祖母の畑では雑草も肥料だ。雑草は伸びすぎると苗の栄養を吸ってしまい、反対に取りすぎると根元が乾燥してしまう。足元の草が苗を守ってくれる。森も同様だ。森が人にもたらす恵みは多い。食べ物や木材、巨木は御神木としてその土地のお守りにもなる。

人が人のための生活を追求しすぎると、自然の存在がないがしろになる。そして気候変動や海洋資源枯渇等の影響を及ぼしている。

この事実が私達が向き合うべき課題なのだ。森と共に生きるのならば人は森に感謝し森を守るのではないか。私にできることは、再生紙や間伐材を積極的に取り入れることや、動物が誤食をしないようにごみは分別して捨てることだ。これだけでもSDGs15の「陸の豊かさを守ろう」につながるだろう。守るか

ら、守ってくれる。共に支え合える未来を目指して、今日も一つ私のミニトマトを収穫する。